

## 難波西鶴と

## 海の道

【50】

森田 雅也

西鶴の『好色一代男』  
「天和2(1682)  
年刊」巻八の四「都の  
姿人形」は「長崎丸山」  
を舞台とした話です。京都に住む世之介は  
59歳。突如、長崎の丸  
山遊郭を目指して旅立  
つと宣言します。それ  
に先立ち、世之介は、  
おもふかぎり(決心)  
あり」と言って、自己  
の金銀を洛中にまき散  
らし、処分します。まず、社寺の堂塔や  
常夜灯を建立します。  
常夜灯は以前に紹介したように沿岸部では灯  
台、京都のような内陸  
部では、夜間の通行人  
の道しるべになりま  
す。世之介も老いて、抹  
香臭くなり、篤志家に  
キャラクター変更かと  
思わせますが、粋な好  
色ぶりも健在です。何と、なじみの役者  
崩れの若衆たちには家  
を与えます。世之介生  
涯の男色相手は、72  
5人なのですから、大  
変だったでしょう。  
なじみの遊女たち  
は、苦界から請け出し  
て、自由の身にしてやります。世之介生涯の  
女色相手は、3742  
人なのですから、これ  
も大変でしょう。  
そんなむちゃな使い  
方をしても、世之介の  
家の内蔵(金庫)の金  
はなかなか減りませ  
ん。後顧に憂い無く、  
ついに8月13日、長崎  
へと出立します。京都伏見から淀川を  
下り、大坂道頓堀に着  
きますが、ここで寄り  
者の家に2、3日も転  
がり込みます。今でも  
変わらぬ情愛のある亭  
主ぶりに、別れの床を

## 各地での豪遊ぶり

難れる時に、気前よく  
金子500両(約5千  
万円)を贈ります。ここで世之介は、そ  
んな金遣いをする理由  
を「とかく、歌舞伎若  
衆の盛りは短いもの。  
人気の浮き沈みも激し  
く、その人氣がなくな  
れば、せつかく買って  
もらった家も売り払っ  
て、最後には、遊び客  
の多い京・江戸・大坂  
にさえ、定まった住み  
処もなくなり、惨めな  
人生を送るものだ」と  
説くのです。老後の生  
活資金にとっておけと  
言うのでしようか。しかし、亭主の歌舞  
伎役者は「(役者とい  
うものに明日の暮えと  
いう概念はありません  
よ、頂戴したお金も無  
駄な使い方をしてしま  
います、その(よこ)に  
罪悪感もありませんが、身につく金もない  
ものですよ」と笑って、  
船着き場まで送ってく  
れます。彼らのある種  
の意地でしょうね。種やかな長崎航路。  
舟は長崎港へと着きま  
すが、世之介は宿屋も  
定めず、直接、丸山へ  
と飛んで行きます。丸山遊郭では、1軒  
の遊女屋で、80、90人  
もが夜見世に出ている  
(三都の遊女屋の倍近  
い)見世もあるという  
繁盛ぶりです。中国人客は昼夜ぶっ  
通して遊び、オランダ  
人は特別に許可され  
て、丸山の遊女を出島  
に呼んでの豪遊。さぞ  
かし、遊女たちはバイ  
リンガルになったでし  
ょうね。  
(関西学院大学文学  
部文学言語学科教授)

## 丸山遊郭目指す世之介